

# 関学での35年をふりかえって

前 野 育 三

気がつけば定年退職まであと数ヶ月というところまで来ていました。私が関学へ迎えていただいたのは1971年4月だから、来年3月末で35年ということになります。35年というのは、歴史的にもずいぶん長い年月ですね。終戦から60年、その6割近い年月。明治初年から137年、その4分の1以上というわけです。私の着任の頃は、1968年から70年まで続いた全国的な大学紛争が、法学部では、まだ完全には終わってなくて、定期試験の季節になると、校舎が暴力的に封鎖されるという事態が続いていました。

あれから35年、恵まれた研究・教育環境の中で、研究・教育にいそしんできました。すばらしい学生に恵まれてきました。とくにゼミ生に関しては、毎年異なった種類の集団ながら、どの年も、個性豊かで勉強熱心な学生の集団となりました。あまり変わった企画もなく、ただ普通に勉強するだけのゼミでしたが、ゼミ生たちは豊かな人間関係を作り上げ、すばらしい集団が毎年出来上がっていました。

私の研究領域は、一貫して刑事政策に関連する分野でしたが、研究テーマは変遷してきたように思います。当初は、刑務所における受刑者処遇が中心でしたが、少年非行が次第に比重を増し、少年司法にシフトし、今日では、研究的関心のほとんどを修復的司法に注いでいます。犯罪の被害者と加害者の対話によって、被害者の心の痛みを和らげ、加害者の更生を促進するという構想は、すべての犯罪に有効というわけではありませんが、今後の犯罪問題の事後的解決の一方法として、重要な役割を演じるようになるのではないかと期待しています。

チャペルアワーにあまり出席することなくすごしたのは、今から思えば、心残りなことです。私は、公立中・高、国立大学で学んできたものですが、中学時代にキリスト教に触れ、高校時代には教会やバイブルクラスに溶け込んでいました（当時、姫路では、カナダ人宣教師によるすばらしいバイブルクラスがありました）。大学へ入学してからは、京大YMCAの「地塩寮」で生活するようになり、そこでの理屈先行のキリスト教解釈に次第に違和感をもつようになっていました。そして、大学院、他大学（明治大学、静岡大学）の教員時代を通じて、キリスト教から最も遠ざかっていた頃に、関学へ迎えていただいたのです。その後、学生諸君との対話などを通じて、キリスト教について、少しずつ深く考えるようになってきました。学生諸君には、チャペルアワーを、精神世界を広げる機会として活用していただきたいと願っています。

（法学部教授）